

IV-55 地方の鉄道駅前の色彩構成

岡山大学 正員○山田 正人
三井建設 竹田 澄
岡山大学 正員 明神 証

1. はじめに

駅前の色彩構成を4色のカラータイルによって表現した。岡山県南のJ R駅前を、色彩構成によって分類し、どのような意味が見いだせるかを色彩調和論を対照しながら考察を加える。

近年、鉄道路線毎に、あるいは、鉄道路線の駅毎にコーポレートカラーを導入することがある。J R各社や民鉄各社にもC. I. (コーポレートアイデンティティー)を導入するなど、色別化が進んでいる。導入される路線は、都市部の、駅や路線が構造上車窓から判別しにくい地下鉄等の路線が多い。一方、地方の路線は地域のポテンシャルや輸送量とも相まって活性度が低い。車窓も、降り立った駅前も都市内の駅に比べ判別のためのアイテムが少なく、単調である。もちろん素朴さを残した風情は失ってはならないが、いかんせん人が集まることを目的とした施設である。ワンポイントアイデンティティーとしてコーポレートカラーを導入することは都市部に劣らず可能性があるように思える。

色彩計画に関する合意形成のための議論の下地となれば幸いである。

2. カラータイル

服飾デザイン、エキステリア/インテリアデザイン等で用いられるカラータイルを模して、天(空)、地面、構造物(中景、背景)、アクセント(アクセサリ)の4色を配列した(図1)。カラータイルはパノラマ状写真をもとに作成した。各駅の正面出口を出たところから同一カメラ(35mmレンズ、自動露出)を用いて、5~6枚程度撮影し張り合わせた。これを乾式コピーし、白黒変換したのち、72色セットのクレパスで塗り絵した。この際、人、車等の可動物は塗りつぶしている。これをもとに各駅について4色を抽出しカラータイル化した。天は空色、アスファルト道路面はくらい灰色で一定とした。アクセントは自動販売機や看板等になることが多い。対象は84駅(86景)、撮影は12月から2月の冬期である。

塗り絵の際、72色の内、よく使用されたのは緑・茶系と灰色系、アクセントとしては青・赤系があげられる。季節柄か、黄色系はほとんど、紫・ピンク系は全く使われていない。クレパスによる塗り絵を採用したのは、季節・天候、順・逆光等による見えの変化を排除するためであり、色をある程度限ることによってパターン化しやすくするためである。色の選択では、人間の目は絞り、焦点とも対象となる特定のものにほぼ自動的に明るさ・大きさ・距離を合わせる機能を持つが、写真化した際、全体が万遍なく写り必ずしもその場の雰囲気や正しく再現していないであろうこと、とくにアクセントについて注意を要した。

86景のカラータイルを分類するとおよそ9つのパターンに集約される。(表1)

3. 色彩調和理論からの検討

色相による類似-対比関係、明度差・彩度差の大小による明彩(色調)の類似-対比関係より、遠景(天)と地面から、構造物(中景)、アクセントにいたる配色の流れを構成した。これをもとにカラータイルのパターン毎に色相と色調による配色類型を得た(表2)。これらを総合して9つのパターンを5つの類型にわけた。一般に類似関係は一体感を醸し、対比関係は相互の主張を表す。

P(Pale)トーンの天(空)にm G(medium Gray)トーンの地面を基本とするA、B類型では中景のl G(light Gray)トーンの構造物がV i(Vivid)トーンなアクセサリを引き立て、行動的な鮮やかな配色であるといえる。A類型ではアクセサリが暖色系のため活動的であり、B類型では寒色系のため落ち着いた配色と言える。中景

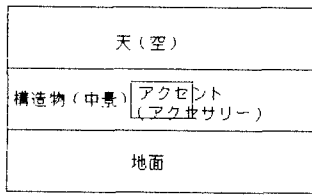


図1 カラータイル

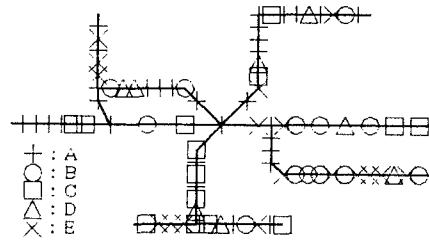


図2 駅前の配色類型

表1 カラータイルのパターン

パターン	天	地面	構造物	アクセント
1	空	白	白・灰・ブルー	赤
2			茶・黄土	緑・青
3			緑	赤
4			赤	緑
5			青	赤
6			赤	青
7	その他	その他	灰	赤
8			茶	青・緑
9			緑	クリーム

表2 配色類型

パターン	色相	明度差	彩度差	明彩関係	配色類型	総合
1	..	大	大	中間-対比	トーンコントラスト	A
2	..	大	大	中間-対比	トーンコントラスト	B
3	対比	中	大	対比-対比	エディットコントラスト	C
4	中間	小	小	中間-類似	トーン	D
5	対比	小	小	中間-対比	ヒューコントラスト	E
6	対比	小	小	中間-類似	ヒューコントラスト	E
7	..	大	大	中間-対比	トーンコントラスト	A
8	中間	小	中	対比-対比	トーン	D
9	類似	小	中	類似-対比	トーン	D

..:地面と構造物、構造物とアクセントの明度・彩度差の関係
 **:構造物が無彩色のため

が l g r (light grayish)、S f (soft) トンの茶(緑)系の C 類型では赤系のアクセサリは中景と色相差が少なくなり、天との対比関係が支配する、一般的に好まれる配色である。同じく D 類型ではアクセサリが寒色系で落ち着きがあり、一体感の強い配色である。中景が D l (dull)、D k (dark) トンの主に緑系の E 類型は、アクセサリが V i トンで高彩度のヒュー(色相)コントラスト配色である。やはり落ち着いた、穏やかな配色である。但し、D・E 類型の配色は明度差が小さいためコーディネートする上では結果的に必ずしも好まれる配色ではないらしい。自然の調和にかなうものはないのかもしれない。

4. 駅前の配色

A 類型は市町村の中心集落の中心駅、B 類型は中心集落の中心を外れた駅または中心集落ではないが集落の中心、C 類型は比較的古い集落の中心駅、D 類型は集落から外れた駅、E 類型は比較的新しい駅に多いと解釈できる。(図2)これらの類型と町の成り立ちとの対応は駅前の構造物を構成するであろう素材を思いめぐらせれば想像がつく。中心集落の駅前であれば誰か一人ぐらい赤い看板を出したがる。木造の建物や錆の浮いた構造物が目立てば町並みは茶色っぽく映るであろうし、コンクリート・モルタル系の壁は白っぽい町並みを形成する。同じ時期につくられた駅は同じような構造になり、結果的に最近の駅は常緑樹の生け垣か山手に造成される住宅団地がポイントになる。

よってワンポイントアイデンティチーの道具として色を用いることは有効である。

5. おわりに

ここで対象としたのは地方の駅である。当初、色あせた P トンを多く予想していたが、季節柄か、自動車の排気ガスか、d l・d k トンの写真が目立った。市街地の中の駅は対象となる構造物が視覚の中で細分化され基調色が抽出しにくい。アクセサリが多様多様でアクセントカラーも絞りにくい。ということがわかった。色、構造の両面から、決して”へん”でない個性的な町並みが現出してほしいものである。